

12月になり、羽合小学校の周りに冬の渡り鳥が多く見られるようになりました。前回の「はわいの風」に羽合小学校の周りで、一度は絶滅したコウノトリを見たという子どもの話を少し書きましたが、12月の全校朝会では、渡り鳥の仲間のがんのお話を写真を見せながらしました。

がんは翼を広げると約150cmにもなる大きな水鳥です。寒い季節になると、何千kmも遠く離れた北の国から、何日もかけて日本に飛んでくる渡り鳥の仲間です。

がんは、長い渡りをするとき一羽で飛ぶのではなく、群れを作って、仲間と協力しながら飛びます。アルファベットの『V』の字に似ていることから、がんの『V字飛行』と言います。

がんが羽ばたくと、その後ろに、飛ぶのに都合のよい、体が浮きやすくなる風の流れます。その風に乗るように、両側に一羽ずつがんがつかます。仲間のつくった風の助けを受けて少ない力で飛ぶことができます。同じように、仲間の後ろに次々とがんが付き、V字になるそうです。仲間と力を合わせることで、1羽で飛ぶよりも70%も長い距離を飛ぶことができるそうです。

ただ、一番苦しいのは、誰の助けもない一番先頭のがんです。どんなに元気ながんでも、長い距離をずっと先頭を飛ぶことはできません。先頭のがんが長く飛んで疲れてくると、後ろのがんが、「次は自分が先頭を飛ぶよ」と合図を送り先頭を交代します。疲れたがんは後ろに移り仲間の助けを借りて力を蓄えます。

一番苦しい先頭は、みんなで順に交代して、元気な鳥が入れ替わりながら飛んでいくのです。しかも、後ろのがんは前を飛ぶ仲間を勇気づけるために、「コア、コア」と鳴きながら飛ぶそうです。

また、遠くに飛び立つときに調子の悪い仲間がいれば、元気になるまで飛び立ちません。また、途中で、病気になったり、傷ついたりして飛べなくなると、仲間の二羽が群れから離れ、そのがんを助け守るために地上に降ります。そして、元気になるまで、または死んでしまうまで、その場から離れず世話をします。また飛べるようになると、元の群れに追いついたり、他の群れに入ったりして飛び続けます。ガンの群れは、このように助け合いを繰り返しながら遠くまで飛ぶことができるのです。仲間同士、助け合わなくては生きていけないことを、がんはよく知っているのです。

私たちは、渡り鳥のがんから、力を合わせること、助け合うこと、仲間をおもいやることなど、学ぶことが多くあるように思うのです。

12月になり、気温がぐっと下がり寒い日が多くなってきました。インフルエンザ等の感染症も少しずつ入ってきています。残り少なくなった2学期を元気に過ごすために、しっかり寝ること、食べること、水は冷たいですがうがいや手洗いをしっかりやることなどに気をつけ、元気に生活してほしいものです。

